

## 旅の心得 - 宮本常一の父の言葉 -

兵藤 哲朗（平成 17 年 7 月 19 日）

（追記 8 月 19 日）

先日、観光交通の仕事で沖縄に行ってきた。関連して色々な本を読んでいるうちに、『沖縄文化論—忘れられた日本』（岡本太郎著・中公文庫）にも行き着き、その民俗学的考察に唸らされた。興味が湧いたので、民俗学や文化人類学関連の書物を数冊買い込んでいる。その一冊、『民俗学の旅』（宮本常一著・講談社学術文庫）に心打たれる記述を見つけた。

宮本常一（1907 - 1981）はわが国の有名な民俗学者である。しかし小学校教員育成を目的とする師範学校卒業が最終学歴であり、学者としての主立った学歴はない。出身が瀬戸内海の島の貧農で、幼少時からの、農作業生活などの自己体験をふまえた民族風習への考察抄文が、柳田国男らの目にとまり、具体的な学会活動へ引き込まれることになる<sup>1</sup>。それ故、彼の研究スタイルは徹底的なフィールドワークに根ざしたものであり、いかなる農民らとも分け隔てなく快活に話しかけたという（その成果は彼の代表作といわれる『忘れられた日本人』（宮本常一著・岩波文庫）に詳しい<sup>2</sup>）。

貧しい農家に生まれた宮本は十分な小学校教育も受けることなく、郷里を離れ大坂へ出向くことになる。大正末期のことだ。家を出る子供に対して、彼の父がいくつかのアドバイスを与えるのだが、これが「旅の心得」として実のある内容である。以下にその文面を転記する。

汽車へ乗ったら窓から外をよく見よ、田や畑に何が植えられているか、育ちがよいかわるいか、村の家が大きい小さいか、瓦屋根が草葺きか、そういうこともよく見ることだ。駅へついたら人の乗りおりに注意せよ、そしてどういう服装をしているかに気をつけよ。また、駅の荷置場にどういう荷がおかれているかをよく見よ。そういうことでその土地が富んでいるか貧しいか、よく働くところかそうでないかよくわかる。

村でも町でも新しくたずねていったところはかならず高い

<sup>1</sup> 民俗学のスタイルとしては柳田国男とは対照的で、彼に師事した期間は短い。むしろ柳田を通じて知り合った渋沢敬三（渋沢栄一の孫）をパトロンとして、宮本民俗学は大きく花開く。経緯は「旅する巨人」（佐野眞一著・文藝春秋）に詳しいが、同書は宮本常一関連書籍の中でも圧倒的に面白い。

<sup>2</sup> 宮本常一モノの必読書。特に「土佐源氏」が有名であるが、読後に上記「旅する巨人」を手に入ればさらに宮本常一の奥部を垣間見ることができる…。

ところへ上ってみよ、そして方向を知り、目立つものを見よ。峠の上で村を見おろすようなことがあったら、お宮の森やお寺や目につくものをまず見、家のあり方や田畑のあり方を見、周囲の山々を見ておけ、そして山の上で目をひいたものがあったら、そこへはかならず行って見ることだ。高いところでよく見ておいたら道にまようようなことはほとんどない。

金があったら、その土地の名物や料理はたべておくのがよい。その土地の暮らしの高さがわかるものだ。

時間のゆとりがあったら、できるだけ歩いてみることだ。いろいろのことを教えられる。

金というものはもうけるのはそんなにむずかしくない。しかし使うのがむずかしい。それだけは忘れぬように。

私はおまえを思うように勉強させてやることができない。だからおまえには何も注文しない。しかし身体は大切にせよ。三十歳まではおまえを勘当したつもりでいる。しかし三十すぎたら親のあることを思い出せ。

ただし病気になったり、自分で解決のつかないようなことがあったら、郷里へ戻ってこい、親はいつでも待っている。

これからさきは子が親に孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。そうしないと世の中はよくならぬ。

自分でよいと思ったことはやってみよ、それで失敗したからといって、親は責めはしない。

人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしっかり歩いていくことだ。

そもそも宮本の父は、貧農であり学歴もなかったが、旅を多くし、人格や知恵に優れた人物であったという。当時は農作業が一段落すると、年に数回、行き先も告げずに一～二週間一人で旅に出かける人も多かったらしい。その多くの旅で得た知恵が、～に反映されている。

仕事柄、海外に出向くことが多いが、そこでカメラ片手に心がけていることはこの四項目にほぼ該当する。もちろん、田畑の代わりに交通手段や建築物を見、お宮の森やお寺の代わりに広場やショッピングセンターを見ることになるのは致し方ないが。しかし、土地・都市・民を知るための旅の視点は、今も昔も変わらず、この宮本常一の父の言葉に通底する。

芭蕉は「月日は百代の過客にて行き交う年もまた旅人なり。」と、無常感溢れる人生と旅を共に演出した。

しかし、この宮本の父の積極的な旅の姿勢は対照的であり、実に説得力に溢れている。そこには客体を知り、それをわが地の向上に繋げる冷徹なフィールドワーカーとしての姿勢を感じざるを得ない。一読し、心に響いたこの一文の理由がそこにある。

以上

## 追記

この1ヶ月、宮本常一関連書籍を読みあさった。手にしたのは下記の数冊であるが、どれも引きつけられる魅力を持っている。

- ・忘れられた日本人 / 宮本常一著 / 岩波文庫
- ・民俗学の旅 / 宮本常一著 / 講談社学術文庫
- ・空からの民俗学 / 宮本常一著 / 岩波現代文庫
- ・Kawade 道の手帖 宮本常一 / 佐野眞一 / 河出書房新社

ちょっと脇にそれるが、「西の宮本、東の網野」というそうである。関連して以下の本も読んだ。面白い。

- ・僕の叔父さん 網野善彦 / 中沢新一 / 集英社新書

孫引き的に

- ・人類最古の哲学 (カイエ・ソバージュ) / 中沢新一 / 講談社選書メチエ

も読んでみた。これは、どちらかというとも松岡正剛の「千夜千冊

( <http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya.html> )」を参考に購入した。「千夜千冊」にはいつもお世話になっている。